

カキとモモの基本的なせん定について

和歌山県かき・もも研究所 主任研究員 堀田 宗幹



はじめに

せん定作業は次期作に向けた秋冬期の重要な作業です。せん定の良し悪しで作業性や果実品質、病虫害防除効果に大きな差が出ることもあります。落葉が進み枝の配置がはっきりわかるようになると、せん定の時期となります。せん定は、地上部（枝や葉など）と地下部（根）とのバランスを整え、樹勢を保つのに重要な役割を果たします。また、生産面では、①作業効率の向上、②薬剤散布時の防除効果の向上、③受光効率向上による高品質果実生産、④摘蕾等の省力化が主な目的です。今年の作業管理上の改善点を踏まえ、せん定を進めていくことになります。ここではカキとモモの整枝せん定についてご説明します。

【カキのせん定】

カキは陰芽から発芽しやすく、側枝をせん除した切り口周辺から新梢が発生します。当年に伸長した枝が結果母枝となり、次期作では結果母枝の芽から発生した新梢が結果枝となり着果します。そのため、結果枝が伸びるスペースを考慮しながら結果母枝の配置をイメージします。

始めははさみを使わず、のこぎりで樹形を乱す徒長枝や、他の枝と干渉しそうな古くなった太枝を切除します。はさみに持ち替え細かいせん定に入りますが、順序としては主枝の先端から開始し、下部に向かって進めていきます。まず主枝の先端を決め、主枝と競合する枝を間引きます。側枝の利用は4年程度までとし、間引きや切り戻しにより更新を図ります。日光が樹間内部に入るよう意識しながら、「三角形」となるように結果母枝を配置します（写真1）。

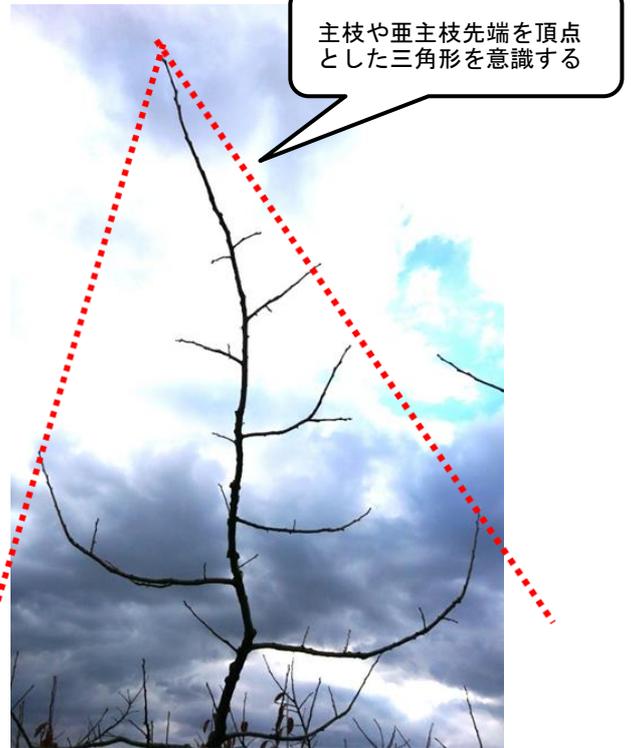


写真1 カキ成木のせん定例

せん定量は、おおむね7割程度の結果母枝切除を目安としますが、垂主枝を縮伐するなど、強いせん定を行った樹では、残った枝のせん定を弱めに行って結果母枝をやや多めに残し、着果負担を掛けて樹が暴れないように留意します。樹勢の弱い樹では、逆にせん定を強く行い、それ以上の樹勢の衰弱を抑えるよう工夫します。

せん定時によく観察し、太くてツヤがあり、節間は間伸びせず、芽が丸みを帯びた、充実した結果母枝を残すようにします。前年に炭そ病が多発した樹では、枝などで越冬している可能性が高いので、病斑のある枝（写真2）を見つけたら優先的に切除してください。



写真2 炭そ病の枝病斑

【モモのせん定】

現在では各地域で様々な樹形が開発されていますが、ここでは一般的な開心自然形仕立てを例に説明します。

モモは陰芽から発芽しにくく、陽光面の太枝に葉陰がないと日焼けして衰弱します。また、果実の重みで枝が下垂気味になりやすく、側枝の基部近くから強い新梢の発生がみられます。養分を強く引き込んでいる太枝を間引くと、養分を引きつけにくくなり、切り口から枯れ込み衰弱することがあります。当年枝には葉芽と花芽が着き、次期作では結果枝となります。これらを念頭に置き、せん定を進めます。

樹勢に応じて程度を調節し、樹勢が強ければせん定を弱めに、樹勢が弱ければせん定を強めに行います。最初からハサミで切ると切りすぎにつながるため、まずノコギリを使って太めの側枝を切ります。樹の周囲を回って枝の配置や状況をよく観察し、枝同士が重なっていたり、樹冠の内部に向かって伸びている枝を切除します。また、主枝や亜主枝の先端部と競合する枝も除去します。側枝を整理したら、ハサミに持ち替えて主枝の先端部から基部に向かいせん定します。樹齢を重ね先端が弱った主枝では、勢いがあり方向の良い立ち気味の枝まで切り戻し、主枝先端を切り替えます。次期作での着果位置や着果数を意識しながら枝を配置していきます。主枝や亜主枝に対して長く伸びた側枝は、更新できる枝が近くにあれば間引き、なければ勢いのある枝まで切り戻します。下垂して先端の新梢が伸びていない側枝では、勢いのある新梢まで切り戻します。間引きと切り戻しを中心にせん定を行いますが、ナシヒメシンクイに食入された枝では葉芽のある所まで切り戻します。最終的に、側枝をダイヤ型に配置するように意識します（写真3）。

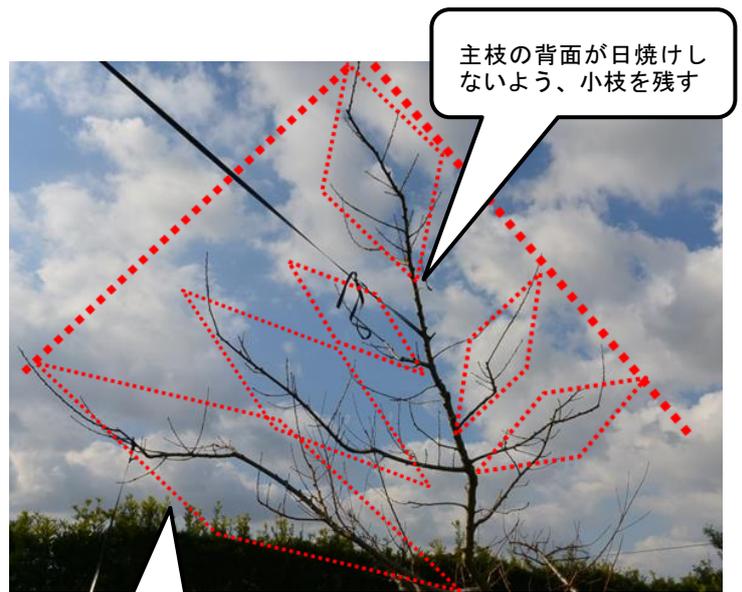


写真3 モモ成木のせん定例

側枝の配置はダイヤ型をイメージして重ならないように

